

# 子どもの理解を深めるための 授業方法の研究

## —園との連携によるフォトカンファレンスの導入—

古野 誠生<sup>1)</sup> ・ 徳安 敦<sup>2)</sup> ・ 豊辻 晴香<sup>3)</sup> ・ 青沼 典子<sup>4)</sup>

## A Study of Teaching Methods to Develop The Understanding Child

### — Introducing The Photo-Conference —

by

Nario FURUNO ・ Atsushi TOKUYASU ・ Haruka TOYOTSUJI ・ Noriko AONUMA

#### 【キーワード】

子どもの理解、フォトカンファレンス、実践演習、アクティブラーニング

#### 【要旨】

本研究では、保育者養成科目の「子ども理解の方法」「保育・教職実践演習」の授業に、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）で「子どもの理解」を深めるためのフォトカンファレンスの手法を取り入れ、その効果について検討した。結果、保育・教育現場の園内研修としてのフォトカンファレンスの実践で報告されているような、①視覚的情報がある為振り返りが容易である、②多くの視点で話し合うことで、保育者によって写真の読み取り方が異なることが分かり保育者の見方、考え方を豊かにする効果がある、という知見が得られた。

---

受理日 平成 29 年 11 月 30 日

1) 純真短期大学こども学科 助教

2) 純真短期大学こども学科 教授

3) 純真短期大学こども学科 講師

4) 筑紫女学園大学附属幼稚園 前保育アドバイザー

## 1. はじめに

現在、保育者の専門性や保育の質について、多く議論されることとなっている。その議論の中で、専門性や保育の質の向上には、「子どもの理解」が欠かせないものとなっている。

「子どもの理解」については、様々な捉え方が存在する。例えば、文部科学省幼稚園教育指導資料第3集「幼児理解と評価」では、「教育内容に基づいて計画的に環境をつくり出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮し展開する生活を通して、望ましい方向に幼児の発達を促すようにすることが重要です。その実現のために必要な視点として」幼児理解が挙げられている。一方、「クラスのすべての子ども一人ひとりがどのようにその時間を生きているのかという子どもの経験の質を、わずかな時間でも丁寧に受けとめ改めて考えてみる」（秋田ら 2012）というような子どもの「今、ここ」の経験の質を、「安心・安定」「夢中・没頭」の二つの視点から捉える「子どもの理解」もある。

また、保育所、幼稚園の園内研修のプログラムの一つとして、保育カンファレンスが実施されており、子ども理解を深めていくことや保育者の保育の見方、考え方を豊かにするような効果があるとされる（平山 1995、鯨岡 2009）。近年は、保育カンファレンスを養成校での教育に取り入れ、学生間で実施することにより、実習として経験した保育の省察に利用した実践も多数報告されている。小山（2007）は、学生らが子どもの活動や保育者の援助をエピソード記述として記録することにより幼児理解や保育者の保育を理解することに効果があると示唆している。さらに狩野（2012）は、実習事後指導場面において、エピソード記録に基づくカンファレンスとポスターセッションが学生の子どもの理解を深めたとしている。

なお、保育カンファレンスでの保育事例の提示の手法として、エピソード記述での呈示やビデオ、写真を用いたものがある。その中で写真を活用した園内研修（フォトカンファレンス）は、「エピソード記録、エピソード記述による園内研修のように事前に事例を文字情報に書き起こすプロセスが無く、その日の保育終了後にすぐにでも園内研修として取り組める良さがある」（瀧川 2016）とされる。

これらのことから、本学では、できるだけ早く子どもとの接触の機会を多くしていくことと、一方的な講義形式ではない主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）で「子どもの理解」を深めるために、保育者養成課程の「子どもの理解の方法」「保育・教職実践演習」の授業において、フォトカンファレンスの手法を取り入れ学生の「子どもの理解」を進める取り組みを実施している。

これまで、保育・教育現場の園内研修としてのフォトカンファレンスの実践報告は散見されるが、保育者養成校での子どもを実際に観察・撮影した後のフォトカンファレンスの実践報告は見当たらない。そこで、本研究では保育者養成科目の「子どもの理解の方法」「保育・教職実践演習」の授業に、フォトカンファレンスの手法を取り入れることの効果と課題について検討していく。

## 2. 「保育・教職実践演習」への導入

フォトカンファレンスの「保育・教職実践演習」への導入は 2015 年度からである。「保育・教職実践演習」の研究保育の中で、園における子どもの姿を切り取った写真をもとに考察を行った。

### 2-1. 「保育・教職実践演習」への導入の意義

卒業年次の後期に開講される「保育・教職実践演習」は、教育・保育現場への就職を間近に控えた学生を対象に、これまでの実習や講義を通して、保育者・教員として必要な知識技能を修得しているかどうかを確認するものである。

「保育・教職実践演習」の後半に近隣園の協力を得て、教育的愛情や幼児理解や保育内容等の指導力について総合的に確認することを目的として、実際の子どもたちを対象とした「研究保育」を実施している。子どもと直接関わり合う保育を通じて、子どもに対する愛情や子ども理解の深まり、指導力などの重要性を検証することができる。また、学生が将来の保育者像をプラスの方向性で前向きにイメージすることができるように、子どもの活動の様子で「ステキ（いいね）」と感じる場面を積極的に切り取ることを心がけるよう促した。

### 2-2. フォトカンファレンスを導入した「研究保育」の展開

研究保育は、活動素材によって造形あそび、音楽あそび、運動あそび、言葉あそび、科学あそびの 5 つのコース（大グループ）に分かれている。一つのコースは概ね 15～20 人で構成される。このうち、「科学あそびコース」にフォトカンファレンスを導入した。

科学あそびコースでは、コーナー保育をイメージして指導計画を立てた。学生は 3～4 人の小グループに分かれ、それぞれのグループが一つのコーナーを担当した。幼児が主体的に活動に関わることができる遊び環境を用意し、幼児自らが興味や関心のある物を選択して遊びができるように、5 種類の遊びのコーナーを設置した。

#### (1) 設定する遊びの内容

科学あそびということもあり、各コーナーの遊びの選定と素材研究に当たっては、次の事項を念頭に取り組んだ。

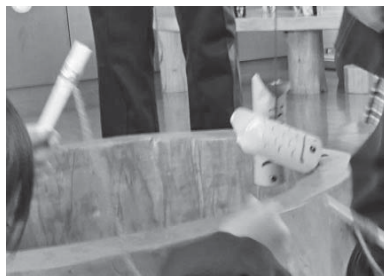
- ① 対象児である 4～5 歳児が興味や関心をもてると思われるもの
- ② 驚きや不思議を感じるができると思われるもの
- ③ 新しい発見や認識の深まりが期待されるもの

2015 年度のコーナーは、「リニアカー」（磁石の力）、「空気砲」（目に見えないものの力）、「木登りサル」（物を移動させる力）、「アーチェリー」（ゴムの力）、「糸電話」（声の伝わり）の 5 種類の遊びで構成された。

2016年度のコーナーは「コロコロスライダー」(転がる力)、「インドアフィッシング」(磁石の力)、「ぐるぐるビー玉」(遠心力)、「ボックスお琴」(張力と音の高さ)、「クルクルプロペラ」(風力:息の力)、「パッケンがえる」(ゴムの力)の6種類の遊びで構成された。



パッケンがえる



インドアフィッシング



コロコロスライダー



クルクルプロペラ



ぐるぐるビー玉



ボックスお琴

## (2) 教材の試作と遊び

小グループは、自分たちが担当する遊びコーナーで使用する教材の試作および遊び環境づくりを行った。試作の過程では実際に自ら遊んでみることを通して、面白く、また安全に遊べるための工夫を加えなければならないグループも出てきた。例えば、リニアカーであれば、車体側の磁石と割りばし側の磁石の方向性により、その走りに違いが生じるため、車体側の磁石の角度を固定するための工夫が生まれた。空気砲やアーチェリーでは、倒れやすい的の工夫やアーチェリーの矢の先端を危なくないようにするための工夫などが行われた。実際に使用するおもちゃ製作に当たっては、子どもたちにとって興味が持てるようなデコレーションを施した。

## (3) コーナーの設定

コーナー設定に当たっては、できる限り子どもたちが自ら関わって活動ができやすい配置や安全に遊べる空間を確保するための配慮などについて大グループ全員で話し合った。

(4) 指導案の作成

各小グループで作成した指導案を基に、大グループで調整し、一つの指導案に仕上げた。環境構成の欄を大きく取り、全体の配置を示すとともに、各コーナーの遊び内容やねらい、予想される幼児の素敵な姿について記述した。2016年度の全体のねらいは「①自ら選んだ遊びに興味や関心をもって取り組む。②遊びを通して新たな発見をしたり、認識を深めたりする。」であった。

(5) 園児を対象とした研究保育の実施と観察および撮影

代表者が保育者となり、遊びの説明などを行った。学生は各コーナーで園児の遊びの観察および遊びのサポートを行うとともに、交代で子どもの活動の様子の中で「ステキ (いいね)」と感じるシーンを中心に撮影を行った。

子どものステキに関しては、事前学習として科学遊びコースに分かれた最初の時間に、小グループによる話し合いと発表を行った。

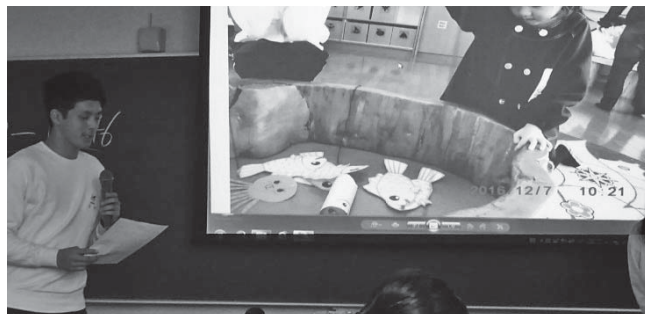


(6) 小グループによるフォトカンファレンス

コーナー保育を終了後、園で撮影した写真をもとに、子どもの心情を理解するための話し合いと、大グループで発表をするための「ステキ (いいね)」と感じるシーンの選択を小グループで行った。さらに選択した写真の抽出理由とそれを表現するタイトルについても話し合った。

(7) 大グループにおける小グループの発表と質疑

大グループにおいて、各グループの発表と質疑を行った。スライドで、各グループが選んだシーン (1枚又はそれに関連する画像数枚) を映し、写真のタイトルとその写真が「ステキ (いいね)」と感じるシーンとして選択した理由について発表した。そのあとで質疑の時間を設けた。



(8) 考察シートの記入と提出

発表を聞いて考えたことや感じたことを、各自で考察シートに記入し提出した。

## 2-3. フォトカンファレンスの事例

### 2-3-1. 事例1

(1) 選択した写真 タイトル「小さな成長」



(2) 選択の理由 (学生の原文のまま)

初めはリニアカーのやり方が分からず戸惑っていたが、自分のやり方でコツをつかみ、次第に車が動き始めて、最後は楽しい笑顔になっていた。

### 2-3-2. 事例2

(1) 選択した写真 タイトル「バンバンバン」



(2) 選択の理由 (学生の原文のまま)

空気砲で的を当てたくて、空気砲を当たりやすい角度にするために工夫して、背伸びをしながら集中していたので選んだ。特に小さな的（ピカチュウ）はなかなか当たらなかったのが集中できたのではないかと思った。

## 2-4. 結果と考察

(1) フォトカンファレンスの事例 (2-3) について

抜き出した二つの事例は、子どもが遊びに夢中になっている瞬間を写真で切り取ることができていた。事例1では、一つ目、二つ目の写真で磁石と車との間隔を開けながら適度な力で押す工夫をしている場面と、三つ目の写真の成功して動き出した時の喜びの表情をする瞬間をとらえることができていた。事例2では、空気砲を設定している高さが被写体の子どもの適度な高さに合わず、本人が背伸びをしながらも良い表情で遊んでいる姿を捉えることができた。この二つの事例のように、複数の写真を使って説明を行うことによって、滝川 (2016) のいうように「4コマ漫画のように一つのストーリーとして語ることで、一枚の写真よりも子どもの思いに着目した話しを語りやすくなる」ということとなった。

(2) 学生の考察シートについて

受講学生数 (17) の回答を得られ、その中からいくつかを抜き出し整理した。(表 1)

【表1】 保育・教職実践演習の考察シートより

	考察シートに記入された学生の感想(原文のまま)
新しい気付きを得られた	・子どもたちで遊び方を考えたり、ポーズをとったりする姿を見てこんな遊び方(感じ方)があることが分かったのが良かった。
視覚的情報があるので振り返りがしやすい	・子どもが楽しそうにあそんでいる姿を写真を通して、そのシーンを振り返ることで、出来事を思い出すことができるし、子どものあそんでいる、たのしそうにしている姿をもう一度みることができるので良いなと思いました ・振り返る時に形に残っているのにより明確に思い出せるのが良いと思いました。 ・遊んでいる時には感じられなかったこと等をあとから写真を見ることで感じたりできて良かったと思いました。また、自分のコーナーじゃない所の様子も見れて良かったです。 ・ <u>写真を撮って、それを見ながら振り返りをする</u> ことにより、言葉だけで、思い出しながら振り返るより、 <u>具体的に思い出すことができるので、話し合いがしやすくなる</u> と感じました。 ・子どもが嬉しそうにしていたり、楽しそうにしたりしている姿が改めて観察することができるのでいいと思う ・30分の短い時間だけでは分からない内容のことも、写真を見ることで全体を見ることができました ・写真でも楽しさが伝わり、さらに、発表者の話を聞くとより分かりやすいので良かったです ・写真を見ることで、子どものいろいろな表情がみれるから、とても良かった ・子どもの姿や表情1つでその遊びがどんなに楽しいのか伝わってくるので写真に残すということ良いことだと感じました ・写真で見るとゆっくり見ることができるので良いと思いました
観察することの重要性に気付いた	・子どもたちと一緒に過ごす事が多い保育士にとって子どもたちの様々な表情、気持ちを近くで見ることができるのは保育士のとっけんだし、だからこそ、その笑顔を守るために環境を整えたり観察する事が大切だと感じました。
その他	・コーナーを見れなかったので写真でみれてよかった

「写真を撮って、それを見ながら振り返りをする事により、言葉だけで、思い出しながら振り返るより、具体的に思い出すことができるので、話し合いがしやすくなると感じました。」に代表されるように、フォトカンファレンスは、文章によるカンファレンスに比べて、視覚的情報がある為に振り返りがしやすいという感想が多く回答された。

3. 「子ども理解の方法」への導入

フォトカンファレンスの「子ども理解の方法」への導入は2016年度からである。園における子どもの観察の中で、子どもの姿を切り取った写真をもとに子どもの心情・意欲・態度についての考察を行った。「子ども理解の方法」では、DVDを使って、実際の子どもの映像から理解を深める学習を取り入れている。今回はさらに保育現場の協力を得て、学生自らが直接観察・撮影をし、写真を選択して話し合うという機会を、半期の間に二回設けた。一連の活動では、保育原理で扱う発達をとらえる視点としての「五領域のねらいと内容」を意識できるよう配慮した。

### 3-1. 「子ども理解の方法」への導入の意義

これまでの生活体験の中で、幼児との接触機会が少なかった学生にとって、子どもの行動の背景にある心情を読み解く力を獲得することは容易ではないことが予測される。実際に保育の場では、複数の子どもたちが保育者のまわりで活動しており、個々の子どもに寄り添い理解していくことは簡単なことではない。止まることなく流れていく遊びや活動の中で、表面的な事実の把握に留まることも多い。保育者を志望する学生にとって、直接子どもたちを観察し、立ち止まり、子どもの活動の背景まで理解を深めるために、写真でシーンを切り取って考察を行うところに、フォトカンファレンス導入の意義の一つがあると考える。

保育に関する基本的な規定は、幼稚園教育要領及び保育所保育指針並びに幼保連携型認定こども園教育・保育要領である。この中に書かれている子どもの発達を五つの側面から捉えた五領域の保育のねらいや内容は、小学校の学習指導要領のような教科教育の内容と異なり、遊びを通した総合的な活動における心情・意欲・態度について書かれているため、学生にとっても実感を伴って理解をすることは困難であると思われる。しかし、子どもを一面から捉えるのではなく多面的に理解していくためには、子どもの心情や意欲や態度を五領域から捉えていくという基本的姿勢が早くから獲得されていくことが望ましい。そのためにも実際の子どもの活動の中から、シーンを写真で切り取り、五領域という視点からとらえて考察を行うところに、フォトカンファレンス導入の二つ目の意義があると考える。このほかにも、同じ場面を複数の目で捉えることにより、自分とは違うものが見方があることに気付く機会となることも期待される。

### 3-2. 五領域やフォトカンファレンスを導入した「保育場面観察」の展開

「子ども理解の方法」の授業は1年前期に開講されるため、学生の観察視点が定まっていなかったことが多い。また、この時期の学生にとって研究保育を実施しながら子どもの観察を行うことは困難であると推測できるため、当授業では視点獲得の事前学習を十分にしたうえで、保育現場を観察することにした。

#### (1) フォトカンファレンスについての説明【事前学習】

フォトカンファレンスを導入する目的等の説明を、教員より学生全体に行った。また写真撮影をする上で、①学校より配付されたデジタルカメラのみでの撮影（個人の携帯電話等での撮影厳禁）、②カメラは常に学校で保管し情報管理を徹底、のルールを全員で確認した。

#### (2) 五領域についての学習と担当割【事前学習】

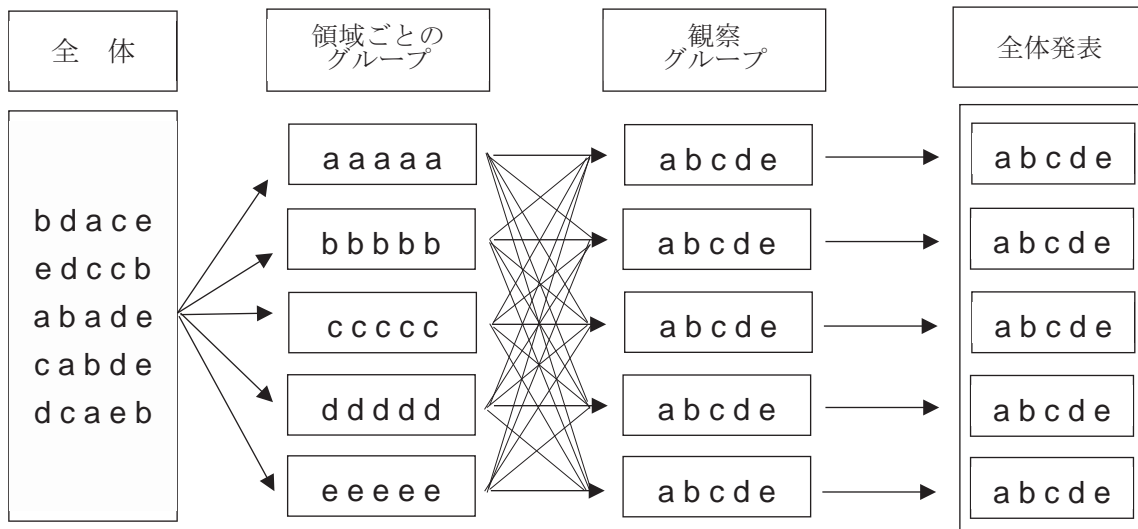
幼稚園教育要領（平成20年告示版）の「第3章 保育の内容」に提示されている五領域のねらい及び内容について、各学生が読み込みその内容の把握に努めた。また、それぞれの学生が五領域のいずれかに振り分けられ、領域ごとにグループを結成した。



(3) イラストを用いての領域ごとの学習【事前学習】

園庭で遊ぶ子どもたちのイラストについて担当領域グループで話し合った。その際、どのような遊びが展開されているのか、イラストの子どもたちはどのような気持ちなのか等、各領域の視点に基づいた考察（分析）を行った。イラストには、園庭全体に亘って少人数のグループがそれぞれに集まり遊びを行っている様子が描かれており、学生全員が同一枚のイラストを見ながら各担当領域の視点で分析した。

<図1. 学生のグループ形態の流れ>



(4) 園児や保育者を対象とした保育場面の観察および撮影

五領域それぞれの担当グループを解体し各領域の担当者が1~2名ずつ配属された新たな観察グループを結成した。次に、学生が協力保育所を訪問し、その時展開されている保育活動の様子を観察した。観察時間は各グループ20~30分程度、観察対象年齢は1~5歳児クラスで、活動によっては縦割りクラスや横割りクラスであった。



学生は各グループにデジタルカメラ一台が配付され、子どもの姿を撮影した。カメラを持っていない学生は「いいね」「すてきだね」と思う場面を観察しカメラ係に伝えた。また、考察や発表のための情報として、写真撮影の前後の子どもの様子を観察した。

(5) 小グループによるフォトカンファレンス【事後学習】

観察グループごとに、撮影した写真における展開されていた子どもの姿や心情、また子ども同士や子どもと保育者とのかわりを理解するための話し合いを行った。そして大グループでの発表に備え、「ステキ（いいね）」と感じる写真（シ



ーン)を選択し、その場面における子どもや保育者の姿を五領域の視点で分析した。さらに選択した写真のタイトル、状況説明、選出理由についても話し合った。

#### (6) 大グループにおける小グループの発表と質疑【事後学習】

大グループにおいて、各観察グループの発表と質疑を行った。スライドで、各グループが選んだシーン(一枚又はそれに関連する画像数枚)を映し、写真のタイトルとその写真が「ステキ(いいね)」と感じるシーンとして選択した理由について発表した。そのあとで質疑の時間を設けた。

#### (7) 考察シートの記入と提出【事後学習】

発表を聞いて考えたことや感じたことを、各自で考察シートに記入し提出した。

### 3-3. フォトカンファレンスの事例

#### 3-3-1. 事例1

##### (1) 選択した写真

タイトル「ひとり遊び」



##### (2) 選択の理由(学生の原文のまま)

子どもが自分からおもちゃに興味を示し、遊んでいることが分かるから。

##### (3) 五領域の視点から(学生の原文のまま)

健康:自ら進んで行動し、いろいろな遊びの中で十分に身体を動かす。

人間関係:自分で考えながら行動している。自分でできそうなことを自分でやろうとしている。

環境:好きなおもちゃや遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。

言葉:いろいろな体験を通じて、イメージや言葉を豊かにする。おもちゃを動かしたり、音を鳴らしたりして、想像する楽しさを味わう。

表現:生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり感じたりして楽しむ。いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。

### 3-3-2. 事例2

#### (1) 選択した写真

タイトル「じゅんばんこ」



#### (2) 選択の理由 (学生の原文のまま)

先生や友達との関わりの中で能動的に楽しく行動していたから。

#### (3) 五領域の視点から (学生の原文のまま)

健康：明るく伸び伸びと、自ら進んで運動しようとする。

人間関係：順番を守って、一人ずつ入る。トンネルから出た時に先生と笑顔で接する。

環境：先生が見守る中、安全にトンネルをくぐる。

言葉：先生がトンネルの向こう側から名前を呼ぶことで自ら進んでトンネルをくぐろうとする。

表現：トンネルをくぐり終わったら、先生に達成感のある笑顔を見せ、もう一回くぐろうと進んで行動する。

### 3-4. 結果と考察

#### (1) フォトカンファレンスの事例 (3-3) について

保育場面の観察および撮影およびその写真についてのフォトカンファレンスは、計 2 回実施した。学生の考察シート (表 2) の「五領域についての理解」に整理した「1 回目はどんな風に行けば良いか分からなくて (幼稚園教育要領の五領域を印刷した) プリントに書かれていたことをそのまま書いたけど、2 回目は自分なりの言葉に変えて書くことができた」と書かれているように、事例 2 は、幼稚園教育要領に書かれている五領域の内容についての書き写しではなく、学生なりの言葉に置き換えて記入されていた。

#### (2) 考察シートについて

受講学生数 (78) の回答を得られ、その中からいくつかを抜きだし整理した。(表 2 参照)

「五領域についての理解」部分に記載しているように「子どもたちの一つ一つの言動が五領域で表現でき」や「その場面が五領域にどう関係しているかを考えながらできた」と記述されているように、五領域についての理解が深まったようである。

「写真に撮ることの効果」部分の「写真を見ながらだったので想像することが簡単にでき」や「後からじっくりとその時の様子を思い出しながら分析することで、その時には考えられなかった子どもの発達の様子が分かり」というように、視覚的情報があった為、振り返りが容易であると感じていることが分かる。

「他者の意見を聞くこと」に記載しているように、「新たな発見や、視点の違いを知り」「見ているところ、感じ方が違って」「他の人たちの意見を聞くことも大切だと思いました」と記述されているように、同じ保育場面を共有しても、その写真についてのそれぞれの読み取り方が違うことを実感したようであった。

【表2】子ども理解の方法の考察シートより

	考察シートに記入された学生の感想(原文のまま)
写真に撮ることの効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちの姿を写真に残すことで、気づかない細かい部分を考え直すことができました。</li> <li>何気なく子どもを見ると、写真を撮るからと言って観察するのは様子が詳しくわかってとても面白い発見がたくさんありました。</li> <li>改めて画像を見ると、写真を撮っていたときには気づかなかったことを学びました。</li> <li>その場面の写真を見ながらだったので想像することが簡単にでき、色々な子どもの動きが学べました。</li> <li>後からじっくりとその時の様子を思い出しながら分析することで、その時には考えられなかった子どもの発達の様子が分かり、おもしろかった。</li> </ul>
子どもの理解を深めることができた	<ul style="list-style-type: none"> <li>何気のない生活、行動から観る視点を変えるだけで発見できるものが多く出てきました。</li> <li>写真を使い、様々な五領域を説明することによって1枚の写真だけで、とても色々なことがよみとれることが分かった。</li> <li>1枚の写真から5つの領域にわけてみんなで意見を出し合ったりして1枚の写真だけでも色々なことが考えられるなど思いました。</li> </ul>
五領域についての理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの1つの行動でもそれぞれの視点から見ると、たくさんの事が詰まっていると思いました。</li> <li>子どもたちの一つ一つの言動が5領域で表現でき、改めて五領域の大切さを知ることができました。</li> <li>年齢によって、違う行動や様子があり、5領域を分析することで、子どもたちがどのようなことを自然に学んでいるかなどが分かった。</li> <li>子どもたちの生活の中でたくさんの5領域があると分かった</li> <li>1つの写真から、一つのことを見つけだすんじゃなくて、たくさんのところからいろんな五領域をみつけることができました。</li> <li>写真から自分が担当した5領域(についてのねらいや内容)がすぐに見つけられるようになりました。</li> <li>(幼稚園教育要領の五領域を印刷した)プリントを見て、自分なりに言葉を変えてまとめることができました。</li> <li>1回目は環境の所をそのまま書いていたけど2回目は自分の言葉でくわしく書けた所が成長したと思いました。</li> <li>1回目はどんな風に書けば良いか分からなくて、(幼稚園教育要領の五領域を印刷した)プリントに書かれていたことをそのまま書いたけど、2回目は自分なりの言葉に変えてかくことができた</li> <li>(幼稚園教育要領の五領域を印刷した)プリントの文章をうつしじゃなく、少しでも自分の言葉に変えて発表した。</li> <li>その場面がどんな場面で5領域にどう関係しているかを考えながらできた。</li> </ul>
・他者の意見を聞くことが大切なこと ・さまざまな視点があること	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の視点からだけではなく、他の子たちの視点を聞き、<u>新たな発見や、視点の違いを知り</u>、他人の考えを聞くことの大切さを学びました。同じ状況や場面でも視点が違う。</li> <li>同じ表現(の領域)でも、みんな見ている所、感じ方が違って勉強になりました。</li> <li>自分だけじゃ気付かなかった点や、違う風にとらえた人もいて、他の人たちの意見を聞くことも大切だと思いました。</li> <li>それぞれの班が、子どもたちの一場面を切りとって、色々な考えを持っていたので、自分では気づかなかったことなどもあり、色々な視点でみるができるようにならなければいけないとおもいました</li> <li>1つの場面をいろいろな視点からみてみると、いろんなことが見えてきたりわかつたりして良かった。いろんな視点から考えることが大切ということを学んだ。</li> </ul>
発達段階の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>「この年齢ではこれが出来る、あれが出来ない」など、発達段階を感じました。</li> </ul>

(3) 五領域の理解について

幼稚園教育要領や保育所保育指針でのねらい及び内容の五領域については、清水(2015)の「学生が子どもの遊びを体験し、実際の遊びの内容からある部分を抽出し、領域との関

連をたどっていくことには、学生自身が領域の内容を自分自身の目でよく読みとることにつながると考えられる。さらに、関連する項目や領域が、数多くあること、分類できないものがあることに気付けることにつながる」や園田（2016）の保育所におけるフォトカンファレンスでの園内研修の事例の知見「受講者同士で事例を検討することにより、子どもの遊びの中には、保育内容五領域が含まれていることが、理解できたという意見があった」にみられるような五領域のねらいや内容が子どもの生活全体を通じ、相互に関連をもつことへの理解が得られたようであった。

#### 4. まとめ

通常の観察では個人の視点だけに偏ってしまう場合や、遊びの流れの中で見過ごしてしまう場面も多々あるが、グループによる「フォトカンファレンス」を導入したことにより、子どもの動きを意図的に切り出し、多くの視点で話し合うことが可能になった。

エピソード記述を用いた保育カンファレンスでは、秋田ら（2012）のこのような『「エピソードをいかに記述できるかは、保育者による子どもの捉えを反映するかもしれない」ことから、「上手い記述の仕方のみ偏る危険性を有していることに留意すべきであろう』という留意点がある。今回、取り組んだフォトカンファレンスでは、撮影した写真をそのままカンファレンスに使用した為、このようなエピソードの記述の仕方に偏らない方法で、子どもの姿を視覚的に切り取り、話し合うことができた。また、視覚的な情報を用いることで、振り返りが容易にできることとなり、おおよそ、保育現場でのフォトカンファレンスの実践報告と同じような結果が得られた。さらに、保育現場でのフォトカンファレンスでは、遊び・活動場面の切り取りの視点が指導的立場になることがあったが、保育・教育経験が未熟な学生による実施だった為、指導的な立場のみで子どもを見ることにならずに、子どもの気持ちに寄り添った形で場面を切り取ることができたように思われた。

「子ども理解の方法」は1年生前期の時期で16年度入学生、17年度入学生に実施し、一方、「保育・教職実践演習」は2年生後期の時期で14年度入学生、15年度入学生に実施をした。その為、同一学年の「子どもの理解」の視点の変化を観察するに至っていない。同一学年の継時的変化ではないが、今回の二つの実践（「子ども理解の方法」と「保育教職実践演習」）を比較すると、2年生後期の「保育・教職実践演習」の学生の子どもの姿の切り取り方が格段に上手であった。保育士養成校での学習や保育・教育実習において、「子どもの理解」の視点が変わり、その捉え方が上手になった可能性が考えられるが、同じ学生の比較ではないので、確証は得られない。今後の課題としては、同一学年の継続的な変化について観察できるようにすることと、同じような保育場面で子どもの観察・写真撮影を行うと、学生の「子どもの理解」をする能力の変化についての考察がしやすくなるであろう。

### 【付記】

本研究をすすめるにあたりご協力をいただいた園児、そして保育所の園長先生、主任の先生をはじめ担任の先生方、ご多忙の中でも本研究に参加してくださった先生に、深く御礼申しあげます。

### 【参考文献】

- 秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊  
(2012) 子どもの経験から振り返る保育プロセス 明日のより良い保育のために, 幼児教育映像制作委員会.
- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子 (2008) 保育の質研究の展望と課題, 東京大学大学院教育学研究科紀要第 47 号, 289-305.
- 狩野奈緒子・坂本真一 (2012) エピソード記録を活用したグループワーク—実習事後指導の中での対話の重なり—, 桜の聖母短期大学紀要第 38 号, 1-14.
- 鯨岡峻 (2009) エピソード記述を通して保育の質を高める, 保育学研究第 47 巻 2 号, 237-238.
- 小山祥子 (2007) 幼児理解と保育者の援理解を深める保育記録に関する研究 (II) —エピソード記録型実習日誌の効用と課題—, 北陸学院短期大学紀要第 39 号, 45-58.
- 清水桂子 (2015) 保育者養成における遊びの実際から理解へ導く [保育内容総論] の授業展開と一考察, 北翔大学短期大学部研究紀要第 53 号, 71-78.
- 園田雪恵 (2016) 「特例講習科目「保育内容総論」におけるアクティブラーニング型授業の報告—遊びの中の保育内容 5 領域の検討—, 夙川学院短期大学教育実践研究紀要第 9 号, 40-48.
- 瀧川光治 (2016) 写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法の提案—アクティブラーニング型園内研修の 1 つとして, 大阪総合保育大学紀要第 10 号, 287-289.
- 野田裕子・田中道治 (1993) 統合保育における精神遅滞幼児と健常幼児の相互作用過程, 特殊教育学研究, 第 31 号(3), 37-43.
- 平山園子 (1995) 園内研修における保育者の成長—保育カンファレンスの有効性の検討, 日本保育学会第 48 回大会発表論文集, 666-667.
- 文部科学省 (2010) 幼稚園教育指導資料第 3 集 幼児理解と評価, ぎょうせい.